

病虫害発生予察特殊報 第4号

作物名：なし及び西洋なし
病名：ナシ赤衣病（仮称）、セイヨウナシ赤衣病（仮称）
病原菌：*Erythricium salmonicolor*

1 発生確認経過

南信地方のなし、西洋なし生産ほ場において、側枝が粗皮症状を呈し枯死する症状が確認された（図1）。南信農業試験場で原因究明を行ったところ、*Erythricium salmonicolor*による赤衣病であることが判明した。

*Erythricium salmonicolor*は極めて多犯性で、かんきつ類、りんご、びわ、いちじくをはじめ、数多くの木本植物に寄生する。本県では、昭和60年に*Erythricium salmonicolor*によるりんご赤衣病の発生を確認しているが、なし及び西洋なしでの発生は国内初確認である。

2 病徴と診断・発生生態

- (1) 枝幹部に発生する。病原菌は傷口から侵入し、はじめ傷口部付近の樹皮部が縦方向に亀裂を生じ、のちに拡大して、病斑部に白色～淡紅色の菌糸塊が皮目状に噴出する（図2）。
- (2) 多湿条件下では、白色～淡紅色の菌糸膜が樹皮表面に急速に広がる（図3）。
- (3) 侵された樹皮は腐敗し、この腐敗は木質部にまで達する。樹皮は剥がれやすくなって脱落し、木質部が露出し枯死する。
- (4) 病原菌は25 前後の気温を好み、20～30 の範囲でよく生育する。
- (5) 病斑は、冬期を含め年間を通じて拡大するが、梅雨期と秋雨期の伸展が激しい。
- (6) 被害枝上で菌糸の状態越冬し、翌年、病斑上に担子孢子（図4）を形成して広く伝染する。
- (7) 発生部位は枝の分岐点の下側や主幹部で、主枝などの太い枝では、北側の日陰となる傷口から発生するケースが多い。
- (8) 初期の病斑は、腐らん病及び胴枯病と類似するが、本病の場合は、病斑部が白色～淡紅色で皮目状の菌糸塊や菌糸膜を形成することにより識別できる。
- (9) 本病は、山間部の谷間等で、霧の出やすいところで発生が多い。

3 防除対策

- (1) 園内を観察し、罹病枝を発見したら切除する。主幹、主枝に発生した場合は、病斑部を削り取り、傷口には塗布剤（トップジンMペーストまたはバッチレート）を塗布し、切り口及び傷口のゆ合促進を図る。梅雨期、秋雨期など菌糸膜を形成する時期に観察すると、発見しやすい。
- (2) 現在のところ、なし及び西洋なしにおいて、本病を対象とする登録農薬はない。
- (3) 管理が悪く、樹勢が衰弱した樹に発生しやすいので、肥培管理に留意し、健全樹勢の維持に努める。



図1 側枝の枝枯症状



図2 菌糸塊



図3 菌糸膜



図4 担子孢子

長野県病虫害防除所
担当：赤沼礼一（所長）
木曾秀紀（担当）
TEL：026-248-6471（直通）
FAX：026-248-6473
E-mail：bojo@pref.nagano.jp